研究調査報告

北九州市若松区惣牟田集落の中世景観に関する調査報告

田上　繁
（非文字資料研究センター客員研究員）

1．調査の経緯

「中世景観復原学の試み」をテーマとする本共同研究は、2016 年度の予備調査を受けて 2017 年度に本格的に着手された。現在 2 年目の 2018 年度の調査研究を続行中であるが、ここでは、2017 年度を中心に、予備調査と 2018 年度の現在までの活動について報告することにしたい。

2017 年度は、3 回の現地調査を実施した。1 回目は、4 月 29 日（土）～5 月 5 日（金）に、歴史班、建築班、民俗班による合同調査を行った。まず、4 月 29 日に先発組が現地入りし、惣牟田の耕地のうち約 2 反歩を草刈りした。草刈りは、景観復原作業の一環として取り組んだものであり、2016 年度の予備調査でも 1 度行い、今回は 2 度目の草刈りとなる。5 月 3 日には後発組も合流し、最初に全員で「殿様の屋敷跡」という伝承が残る竹林の中の畑地跡を踏査した。翌 4 日は各班の専門分野の調査を行い、歴史班は前日の「屋敷跡」の補充調査、建築班は集落に 1 棟残存する茅葺屋根の家屋調査、さらに、民俗班は聞き書きと石造物の調査に取りかかった。

2 回目の調査では、関連資料を所蔵する旧小石村の高崎眞吾家文書の写真撮影を行った。同文書は若松市民会館（若松駅前）に借り出して作業を進めた。高崎家は福岡藩（黒田藩）の大庄屋を勤めた家であり、同家には慶長 7 年（1602）の検地帳をはじめ系図や由緒書、馬牧関係の文書など数百点が保存されている。3 回目の調査は、10 月 27 日（金）～30 日（月）の日程で、次回の調査の段取りと関連文書の収集のために現地入りした。とくに、景観を復原するための草刈りや田植えを行う条件の有無について地権者と打ち合わせた。また、関連資料の収集では、福岡県立図書館（箱崎）へ出向き、豊臣秀吉の軍師として名高い黒田官兵衛（如水）の二十四騎の一人である竹森氏に関する文献と資料を閲覧し、コピーサービスを受けた。

写真 1　民俗班による聞き書き調査

以上が 2017 年度の調査の主な内容であるが、本共同調査を始めるに際しては、上述したように前 2016 年度から予備的な調査を進めていた。2016 年 6 月 24 日（金）～27 日（月）には、田上経済ゼミナール II（経済学部 3 年生）による旧小石村（現、若松区小石本村）の高崎家文書の写真撮影を行った。当初は本共同研究を視野に入れたゼミ調査ではなかったが、惣牟田が小石村の中の集落であることから、惣牟田の景観と文書がうまく結びつく結果となった。また、その年 8 月 24 日（水）～29 日（月）には、当時進めていた共同研究「北九州市若松洞海湾における船上生活者の歴史的変容」の補充調査として若松を訪ねた折に、高崎家文書に出てくる馬牧の土塁が残る菖蒲谷へ出掛けたところ、土塁は発見できなかったが、すぐ近くにある惣牟田の集落と中世的な景観に出くわした。

これが契機となり、本格的に中世景観復原学の共同調査を計画することとなった。早速、10 月 5 日（水）～7 日（金）に予備調査を敢行し、歴史学と建築学の研究メンバー 3 名で集落の住人のお宅に直接うかがった。もう一人の住人もそこに居合わせ、調査の趣旨と調査内容を説明すると、お二人から快諾を得ることができ

た。翌 2017 年 1 月 3 日（火）～ 8 日（日）の日程で現地入りし、惣牟田の耕地の一部を草刈りした。これが最初の草刈り作業であった。こうした前年度までの予備調査を基礎にして、2017 年度の調査が推進されたのである。

写真２　惣牟田集落の景観

２．戦国武将竹森氏と惣牟田集落

そこで、これまでの調査で知りえた小石村の惣牟田集落と黒田官兵衛や竹森氏との関係について少し説明を加えておこう。以前から小石村には竹森清左衛門貞幸の墓（供養塔）が残っているのは知られていた。貞幸は、黒田二十四騎の一人竹森石見次貞の長子で、播州時代から父親とともに官兵衛に仕えて戦乱をくぐり抜けてきた武将である。慶長 15 年（1610）には、官兵衛の長子

写真３　竹森石見次貞の末裔の墓石

長政（福岡藩初代藩主）から早良郡生松原の東方に松を植えるよう命じられている。また、清左衛門は土木技術に長けた人物で、惣牟田に居住し、慶安２年（1649）に当地で没した。法名を性屋道也居士と称し、遠賀郡若松の吉祥寺に葬られたという。小石村西山には供養碑が今も残る（注 1）。ただし、その碑は、後年の寛政２年（1790）に末裔の貞恒が再建したものである。それが以前と同じ場所にあって再建されたものなのか、また、清左衛門が惣牟田にどのような理由で住みついたのか、といった疑問は今後の調査の進展により明らかにされていくものと思われる。

ほかにも、惣牟田の山林の中には次貞の八男新右衛門利友の「抱山」と刻まれた石碑、棚田の上方付近には利友から新右衛門利実、新之丞実信と続く、新之丞実信の養子九右衛門（大音与兵衛の二男）の墓が妻や子息の墓とともに残っている。なお、新右衛門利実は利友の二男であり、その二男が家を継いでいるのである。利友の長子は、次貞の九男道策の養子となった道悦であり、この人物は大宰府に地図を奉納している（注 2）。このように、近世初期から竹森氏と惣牟田との結びつきは強く、それはまた、惣牟田の棚田がその時期すでに開かれていたことを物語っている。慶長７年の「筑前国御牧郡内小石村水帳」（高崎家文書）には、「すう牟田」と小字が付された田があり、近世初期の「名寄帳」にも「すうむた」の小字が随所にあらわれる。おそらく、「そう牟田」・「そうむた」（＝惣牟田）に比定される小字名と考えられ、すでに慶長７年段階で惣牟田に田が開けていた事実を想起せしめるのである。慶長７年といえば、慶長５年の関ヶ原の戦いから２年後であり、豊臣氏から徳川氏へ覇権が移る時期である。戦国武将の竹森清左衛門貞幸が惣牟田に住み、近世初期に田畑が開墾されていた点などから、惣牟田の棚田が近世初頭、ないしは、さらに遡った中世後期には存在していたことが立証される。

惣牟田を含む小石村と黒田官兵衛との関係は、竹森氏からだけではなく、高崎家との関係からも追究が可能である。高崎家の系図や由緒書には、同家が官兵衛と同じ播磨国の出身で、天正期ごろ、官兵衛の「勘気」（咎め）を被ったため豊前国中津へ移住したと述べられている。ところが、天正 15 年（1587）に官兵衛が秀吉から 12 万石を与えられて中津に移ってきたため、そこを「退出」して筑前国小石村に移り住んだという。その後、官兵衛の長子黒田長政が福岡藩を興すと、高崎家では長子が小石村に定住し、二男は豊前国小笠原藩（小倉藩）の家臣に、三男は小倉で「播磨屋」の商号を持つ商家となり、小石村に残った長子が現在も続く高崎家の祖と記すの

である。本共同研究は、中世景観の復原を目的に、その棚田の地形、墓石を含む石造物、歴史、民俗、家屋などの調査、分析を行うが、中世景観と銘打つならば、まず、その景観が戦国・近世初頭に展開していたか検証する必要がある。その意味では竹森氏の存在や、各種の石造物、墓石群はそれを裏付けるのに十分な資料となりうる。こうした歴史班の調査と併行して、建築班は、2017年の調査で茅葺屋根の屋敷の調査を進めた。また、民俗班は、石造物の調査、及び集落の住人よりの聞き書き調査を行った。いずれも調査の途中であり、中間的な報告は今後の調査を進めた後となる。全員で調査した「殿様の屋敷跡」と伝承される場所の調査については、一時期畑地として使われていたため、直ぐにはその痕跡を見つけ出せなかった。この点については、近くの山中にある大庭隠岐守の屋敷跡（黒田氏よりさらに以前の麻生氏時代の遺構といわれている）の石垣と類似した石垣が残っているので、今後調査を進める予定である。

3．中世景観の復原と資料化

ところで、本年2018年度のこれまでの調査では、主に景観復原の試みとして棚田の一部を借りて、実際に6畝（約595平方メートル）ほどの米を作ったことが特筆される。田植えの半分は手で植え、稲刈りはすべて手刈りで行った。これは、作業の一部始終を記録することで、すでに消えつつある水田の景観を分析する素材として資料化することを目指したものである。景観論については、そのアプローチの仕方に三つの方法があると指摘されている（注3）。一つは、過去の景観を復原して、その空間的パターンや変遷過程、あるいはその諸要因と背景を究明する方法である。二つ目は、現在の村落を対象として、集落形態や家屋・耕地の配列などの景観と、それに関連した社会秩序や社会統合など社会構造を解明しようとする方法である。最後に、文化人類学や民俗学の村落空間論といった研究手法を導入しながら、現代村落の景観の背後にある住人自身の主観的な空間的秩序を解読するという方法がある。本共同研究では、これらの方法を統一的に取り入れることによって、一部復原した景観とその稲作記録から惣牟田の地形の経年変化、何世代にもわたって築き上げてきた社会構造やさまざまな秩序の変遷の解明を試みる。

田植えの準備は、4月28日の棚田4枚の草刈りから始まった。5か年以上休耕地となっていたため、一番心配されたのは、「バン」（盤）が壊れていないかということであった。周知のように、水田は表土から数十センチ下に、田の水が抜けないように石と粘土を用いた「バン」が築かれている。長く休耕田とすると、灌木や竹などの根がはびこって「バン」を壊してしまう恐れがある。後日、水を張ったとき、幸い4枚の棚田の「バン」に支障はなかった。その前に刈り取った雑草の草焼き、畔作り、手押しの耕運機を使っての2度の耕耘（こううん）、用水路の整備と田への引水、水を張った後の2度の耕耘、セイタカアワダチソウに代表される雑草の根の水中での除去など、田植えへ向けての作業が5月末まで進められた。

写真4　手植えによる田植え作業

6月3日の田植えには、日吉神社の氏子衆や、知人・縁者など17名がボランティアで参加した。氏子衆は神社の注連縄に使う藁が必要ということで積極的に関わっていただいた。田植えは綱を田の中に引き、各人がそれを目安に共同で行った。そうして植えられた稲は、順調に成長し、その間にも、肥料とカメムシ予防の薬剤の散布、日常的な水の管理、イネ科の雑草の除去、畔の草刈り、など一日も疎かにできない作業が続いた。今年は例年にない酷暑のため水不足となり、用水路からの水も途絶えがちで、川からポンプで水を汲み上げなければならない状況に至った。一部の稲の穂先が黄色くなり、異常事態になりつつあったが、給水により何とか食い止めることができた。

そうして実った稲は、9月22日にやはりボランティアの人たちの手によってすべて刈り取られた。その作業

写真５　稲穂の実る棚田の景観

写真７　天日による稲の「カケ干し」

写真６　手刈りによる稲刈り作業

の前には、「カケ干し」用の竹数十本の伐り出し、稲刈りに備えた畔の雑草刈り、イノシシによる食害の防止対策などに忙殺された。とくに、稲刈りの５日前ごろには、畔についていたイノシシの足跡や一部穂先の柔らかいところを食べられていたのが確認され、米作りの指導者（田の持ち主）から「これは偵察で、今夜数頭で必ず米を食べに来る」との指摘を受けた。そのため、その夜から５日間、車の中で寝ずの番をして、１時間ごとにライトを点滅してはイノシシが田に近づかないように警戒した。それが功を奏したのかイノシシによる被害はなかった。また、稲刈りのときには、マムシ３匹と遭遇し、噛まれるなどの被害はなかったものの、自然の厳しさを実感させられた。

それから、稲刈りの翌日は全部で６か所の「カケ干し」を組み立てて、天日による乾燥に取りかかった。２週間ほど干したのち、「カケ干し」から外しながらコンバインによる脱穀を行った。このときも、その１週間前にこの作業を行う予定であったが、台風24号のため延期を余儀なくされた。そのとき、「カケ干し」１か所が風で倒れたため、全部外して組み立てからやり直した。しかも、１週間後に予定した日にも台風25号に襲われ、数か所の「カケ干し」がバタバタと倒れてしまい、それらを起こすのは困難で、これ以上脱穀を延期することはできなかった。薄氷を踏む思いで、強風の中、脱穀を行っていただいた。コンバインを出していただいた方、脱穀の作業を手伝ってくれた方々には感謝以外の何ものもない。そのあと、籾摺り、精米を終えて230kgの白米が収穫された。

以上のような実際の稲作りを通して、棚田の形状の特質や自然環境、共同で行う田植え作業、水利をめぐる権利関係、日照りや台風などに見舞われる災害への対策、危険な害虫・害獣から作物と自分の身を守る方法など、惣牟田における中世の棚田の景観史を考察する上で多くのことを学んだ。これらの作業は、資料のない研究対象に対して、実践で得た体験そのものを資料化する試みとなろう。

［注］
(1)『福岡縣史資料』第１輯ほか（福岡県、1932年６月ほか）、『福岡県史』第２巻上冊（福岡県、1963年３月）、『福岡県史』近代資料編　福岡藩初期（上）（西日本文化協会、1982年３月）、『若松市史』（名著出版、復刻版1974年12月）など。
(2) 渡辺美季「竹森道悦と地図奉納―『世界図』・『肥前長崎図』の紹介を中心に―」（『九州史学』第146号、2006年10月）
(3) 今里悟之「景観史と民俗地理学の接点」（金田章裕編『景観史と歴史地理学』所収、吉川弘文館、2018年４月）